
仲良く並んだ二つの雨傘

竹仲法順

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仲良く並んだ二つの雨傘

【Nコード】

N4988D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

二〇〇八年六月。梅雨時で、東京の街は雨に濡れていた。その日、互いにバイトがなかったボクと亜里沙は二人で新宿の街を練り歩き、やがて交差点で差していた傘を取って、キスし合う。それからボクたちは、亜里沙の自宅アパートへと向かうが……。

六月。全国各地が梅雨入りし、連日雨が降り続けている。

ボクはその日、傘を差して新宿の街を歩いていた。ブルーの雨傘を差したボクの脇には、ピンク色の傘を差して歩く亜里沙がいる。

「梅雨時でジメジメしてるわね」

「うん。でも仕方ないよ。梅雨が終われば、すっきりした暑い夏が来るからさあ」

「そうね。それまでは我慢、我慢」

亜里沙がそう言い、傘を差したまま、新宿の目抜き通りを歩いていく。ボクは亜里沙の真横に立ち、傘を差した右手とは真逆の左手で亜里沙の手を握る。

半袖シャツにジーンズ姿の亜里沙は、その日バイトがないらしく、丸一日ボクとデートしていた。偶然と言うべきか、ボクもその日はバイトがなく、フリーだった。

新宿近辺を二人で散策して、お昼時には定食屋で一緒に昼食を食べた。

亜里沙の体からは、食事後に噛み始めたミントガムの香りに加え、フローラス系の女物の香水の香りが漂ってくる。その香りは一際優しく、ボクはその匂いが鼻腔に入ってくるたびに、亜里沙に対する言葉に出来ない愛おしさを感じていた。

雨はずっと降り続いていて、通りを練り歩くカップルたちは皆雨傘を差している。

ふっと交差点で立ち止まったボクたちは、信号待ちの間、じっと前を見据えた。

多数の車が通っていて、今日も首都の心臓部は忙しい。

ボクは恨めし^{つら}そうに天を見上げた。空全体に雨雲がかかっている。一向に晴れる気配はない。

「雨、このまま降り続くのかな？」

「うん。多分夜まで降るわよ。昨夜の天気予報で言ってた。今日は関東地方全域で雨模様だつて」

「そう」

ボクが頷くと、亜里沙が嘔んでいたガムを吐き紙に捨て、

「孝」

と改めてボクの名を呼んだ。

「何？」

「キスしない？」

「キス？」

「うん。今、信号が赤でしょ。その間にキスするの」

「……」

ボクはそれを聞き、亜里沙が提案した大胆な路上キスに思わず言葉失った。

だが、なぜかしらボクは一転亜里沙の提案に乗り、

「うん。そうしよう」

と言った。

すると亜里沙が差していた雨傘を折り畳んで雨に濡れながら、ボクの体を引き寄せて、自分の唇をゆつくりとボクのそれに重ね合わせてきた。

「……」

ボクも傘を差すのを止めて、雨に打たれながら、亜里沙の愛の仕草に応える。

ボクたち二人はしばらくの間、人が見ているのも構わずに、ゆつくりと口付けを交わした。無我夢中で互いの口中にある熱や潤いを求め合う。

やがて愛を誓う儀式が終わり、亜里沙が元通り傘を差して、

「雨で濡れになっちゃったから、あたしの部屋で温かいシャワーでも浴びない？」

と誘ってきた。

ボクもいったん畳んでいた傘を差し、亜里沙の言葉に頷く。

ボクたちはそれから新宿駅の方向へと向かった。外回りの山手線で高田馬場にある亜里沙の部屋に行くためだ。

ボクも亜里沙も着ていた服がひどく濡れていて、おまけに冷たかった。

新宿駅に着くと、二人して券売機で高田馬場までの切符を買い、駅のホームへと歩いていく。

亜里沙が左腕に嵌めていた時計を見た。デジタル時計は午後六時前を差している。

「ちょっと早いけど、これから部屋でシャワー浴びて、夕飯食べよう」

亜里沙がそう言った。

「ご馳走になっちゃってもいいの？」

ボクがそう問うと、亜里沙が、

「自慢じゃないけど、あたしの手料理、結構美味しいのよ」

と言い、フフフと笑う。

やがて電車がホームに入ってきて、ボクたちはそれに乗り込んだ。ゴトンゴトン……。

電車はボクたちだけでなく、昼間都心で働いた人たちをベッドタウンへと運んでいく。

ボクと亜里沙は互いの手を繋いだまま、電車に揺られた。

時間が過ぎ、やがて夜になる。

ボクたちは午後六時半頃、高田馬場にある亜里沙のアパートに着き、部屋に入り早々二人で一緒に温かいシャワーを浴びた。そして入浴後、二人きりでささやかな夕食を取る。

その夜。

亜里沙がリビングの窓を開け放ち、ボクたちは入ってくる南風に煽あおられながら、シングルベッドで眠った。

辺りは学生街とあってか、外では絶えず若者が騒ぐ声が聞こえてくる。

ボクも亜里沙も大人なので、そんな埒のない騒ぎ声など気にも留

めず、朝まで熟睡した。

明け方、南向きの部屋に日が差し込んでくる。

ボクたちは起き出し、新しい日の準備を整え始めた。

玄関に置いてある仲良く並んだ二本の雨傘は、水滴が落ちてすっかり乾いている。ボクたち二人は交代で洗面を済ませ、各々朝食代わりのカフェオレを一杯ずつ飲むと、部屋を出た。

ボクは亜里沙から雨で濡れたTシャツを入れる袋をもらい、それに汚れ物全てを詰め込んで、来たときと同じくリュックを背負い、駅まで歩く。

駅に着き、改札口でボクが、

「じゃあな」

と言うと、亜里沙も、

「じゃあまたね」

と返し、ボクたちは離れた。

これからボクは池袋にある自宅アパートに戻って、午後からのバイトに備える。

一方の亜里沙は、新宿にある派遣のバイトに行くつもりでいた。

昨日と違い、空はすっかり晴れていた。ボクは手元に持っている傘に幾分照れ臭さを感じながら、亜里沙とは真逆の方向に走る電車に乗り込む。

プシュー。

電車が音を立てて閉まり、動き出して、ボクはほんの数分間電車に揺られた。

傘を差していない方の手である左手に、昨日繫いでいた亜里沙の手の温もりを思い出す。

“ 今度会えるのは一週間後だな ”

ボクはそう思いながら、着実に自分のアパートへと近付いていく感覚を味わった。

時間が流れていく。

空には雲一つなく、今日は昨日と違い、典型的な夏日だ。

ボクは空いている車内の様子を眺めながら、昨日着ていた汗だくのTシャツのにおいを嗅ぎ取った。若者特有の汗のにおいが漂っている。

ボクが今日着ているのは、亜里沙がたまたま部屋に持っていた男物のTシャツだった。

ツィエルのシャツは身長が百七十六センチあるボクにはちょうどいい。

汗が出てきて、車内に入っているクーラーで冷やされ、すぐに乾く。

ボクは不意に、ジーンズの左ポケットに手をつ込んで、中に入っているあるものを握り締めた。

それは昨夜のセックスの際に使わなかったコンドームだった。

(了)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4988d/>

仲良く並んだ二つの雨傘

2009年3月24日10時33分発行